十二月の御教え

信心していても、おかげが遅い、まだかまだかと思ってうろたえて、真の心が大事であるということを知らない。神にお頼みして、一週間たっても治らなければ、まだ治らない、おかげはないと言って神を恨む。三年、五年、医者にかかり薬をのんで、まだ治らなくても、医者には不足を言わないで、また頼みすがっていく。神はお気の毒なものである。

……「天地は語る」第八十三条……

解説　この御理解は、教祖直信・国枝三五郎さんが、再度の失明の時に、晴眼のおかげを願った時の金光大神様のみ教えであろうと思います。

国枝さんは、他宗の熱心な信者でありましたが、眼病がもとで失明したのを夫人が金光大神様のもとへ日参を続けて、一年半で、晴眼のおかげを頂きました。その後六年間で三度も失明しましたが、その都度、金光大神様に願って、晴眼のおかげを蒙りました。

このご理解は、その時の国枝さんの「早くおかげを頂きたい」と焦る思いに対して「願いが叶うには、真の心にならねばならぬ」ことを教示されたお言葉であります。

金光大神様ご自身、かつて人一倍信心するも次々と不幸が重なりましたが、その時「神様の思いに適った真の信心にならねば」と思い通し、一層精進した結果、大神蔭を頂いたことから、このようにご理解をなされたのだと思います。